



左京区北部山間地域の将来像 検討に向けたワークショップ

2026年3月7日(土)

まとめ報告会

百井地域

実施日：2025年12月13日（土）

地域住民の声から描く、地域の将来像づくりに向けて

主催：左京北部山間地域自治連絡協議会

共催：左京区役所

運営・分析：特定非営利活動法人きょうとNPOセンター



本会の目的と地域の基礎情報

◎ 開催目的

左京区の北部山間地域は、豊かな魅力と資源にあふれる一方で、人口減少や高齢化といった課題にも直面しています。

2025年12月に開催したワークショップは、将来に残したい宝物や、理想の暮らし、その実現のために必要なアクションを共に考えていく場として、地域の将来像を住民自らの手で描き出す第一歩として、左京北部山間地域自治連絡協議会が主催しました。

本報告では、皆さまから上がった意見とその分析結果を共有します。

◎ 地域の基礎情報（百井）

🏠 総世帯数：16世帯

👤 総人口：29人（男17人、女12人）



本ワークショップの概要



本ワークショップの概要

実施日：2025年12月13日（土）14：00～16：00

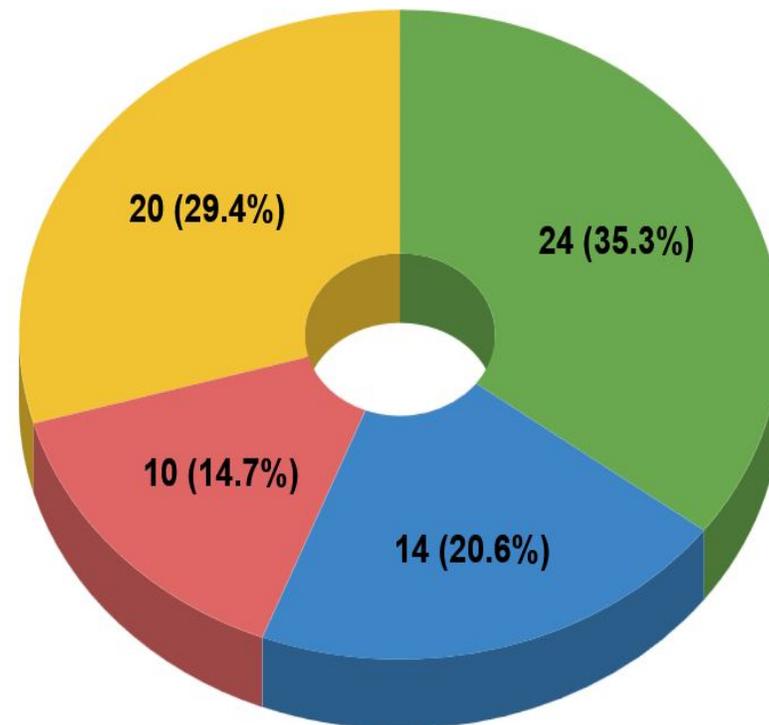
会場：百井自治会館

参加者数：17名（N=17）



分析の区分

- ① 積極的に取り組みその効果を期待するものや、活用していききたい資源など
- ② 経過を観察するもの、今のままであって欲しいものなど
- ③ 取り組んでいるものの成果が見られないもの
- ④ 新たな取組として創造するもの



カテゴリ①：積極的に取り組みその効果を期待するもの、活用していきたい資源など

○「ももいなつまつり」に関すること

- ・年々参加者が増えている夏祭りを1回で終わらせず、特産の農産品やジビエの提供を通じて夏祭りを契機とした次へ繋がる仕掛けをつくる。

○高原野菜の栽培とその支援に関すること

- ・多くの人から「本当に美味しい」と評価される百井の野菜をこれからも継続的に栽培し、その魅力を積極的に発信する。
- ・大学サークルが百井での野菜栽培に協力してくれている。この関係を維持する。

○特産品の開発と資金化に関すること

- ・かつて自生していたクマザサの再生や、シカの食害がないシキミ（仏事などでよく使われる常緑の植物）の栽培を続ける。
- ・各家庭で味が異なるしば漬けや、伝統的な杵つき餅を商品化して販売する。
- ・過去に実施したトマト食べ放題のような、集客力のある収穫体験に地域で取組む。

カテゴリ②：経過を観察するもの、 今のままであって欲しいものなど

○空き家の把握と管理体制に関すること

- 空き家の所有者が分からない。定期的に戻ってくる家もあり、単純に空き家と判断できない。台風時にモノが飛んでくる危険や防犯上の不安があるため、どこに空き家があるのか、誰の所有なのかを調べ把握する。

○草刈りとその負担軽減に関すること

- 高齢化で、地域住民の減少で村総出での草刈りが難しくなり、負担が増している。無理のない管理方法の模索が必要である。

○外部事業者との情報共有と信頼構築に関すること

- キャンプ場（リローカルタウン京都大原百井）の取組内容や運営実態が見えない。何をしているかわからない。地域との情報共有が不十分であるため、年度ごとの計画などを開示してもらい情報の共有に努めたい。

○伝統技術と自然環境の維持に関すること

- この地域において炭づくりの技術を伝承しているのは一人だけである。このままでは炭づくりは誰もできなくなってしまうことが不安である。
- 百井の美味しい水や、山椒、フキ、米作りといった既存の良質な資源を現状のまま維持する。

カテゴリ③：取り組んでいるものの成果が見られないもの

○公共交通インフラの整備に関すること

- ・ 毎年、路線バスの開通要望を出しているが、人口減少や利用者の少なさを理由に実現しない状況が続いている。
- ・ 高齢になった時や、怪我などをした際の移動の足がないという不安が解消されていない。

○道路環境の改善に関すること

- ・ ガードレールがボロボロで離合も難しい箇所がなかなか進まない。
- ・ 除雪機によって道路が傷んでしまうが修繕に課題がある。

○イベントの持続性に関すること

- ・ 夏祭りのメインだったハスが泥の堆積などで咲かなくなってきた。再生したいが人手が足りない。
- ・ 夏祭りで一時的に人は来るが、それがその後の関係創出や経済効果に繋がっていない。

カテゴリ④：新たな取組として創造するもの(1)

○デジタル発信と新技術の導入に関すること

- 炭焼きやジビエ解体、夏祭り、校歌などの百井の日常をYouTubeで発信する。
- 花火大会に代わり、ドローンを使った新たな「ドローン花火」を検討する。

○旧小学校等の有効活用に関すること

- 給食室を活用した限定カフェ、図書館や、子どもが遊べるバスケットゴールの設置など、住民に身近な拠点として活用する。
- 素晴らしい校歌を12時と17時に流し、地域のシンボルとする。

○未利用資源の利活用に関すること

- 柿、梨、柿の葉、イタドリ、ヨモギなどを、加工品として商品化する。
- 美味しい水を汲みに来る人が多いため、これを商品として活用できないか検討する。

カテゴリ④：新たな取組として創造するもの(2)

○百井ならではの体験型観光に関すること

- ・シカ・イノシシの解体体験、昆虫食の食事会など、独自の企画を行う。
- ・無農薬の畑を活かし、かつてあったイナゴ取りのような形のツアーを復活させる。
- ・トンボが多い環境を守るため、水路掃除をしながらヤゴを育てる活動を行う。

○土地の有効活用とマッチングに関すること

- ・農業をしたい人と余っている土地のマッチングを行う。所有者の整理を進める。
- ・現在は大学生と農家が個人的に繋がっているが、個人としてのつながりだけではなく地域と大学生がつながりを模索し、より地域の活動に参加できるように促していくよう関係性を構築する。

傾向と特徴

○空き家や土地管理における「実態把握」の必要性に関すること

空き家問題について、台風時の危険防止や空き巣対策など防犯の観点から「誰の所有物か」を明確に把握したいが、所有者が分からない、空き家に見えても定期的に利用されている空き家もあり、空き家かどうか判断できない課題がある。また、農業をしたい人と耕作放棄地をマッチングさせるための基盤整備や、耕作放棄地を含む農地の区分け整理に対する要望もあり、空き家・農地の実態把握、情報の整理が必要である。

○地域資源の多角的な活用に関すること

自然資源や農産物を単に維持するだけでなく、「商品化」や「体験」に繋げて経済循環を生み出そうとしている。家庭によって味の違う「しば漬け」や「餅」の販売、ヨモギや柿の葉といった未利用植物を活用した商品の販売、「トマト食べ放題ツアー」や「イナゴ取りツアー」のような身近な資源に新たな価値を見出す取組に関する意見が上がった。また、百井小学校をコミュニティの核として再定義し、旧小学校をカフェや図書館として活用する案など、単なる「施設」ではなく、住民と外からの人が自然に集える「身近なよりどころ」としての再生することを考えている。

○外部連携と新技術に対する柔軟な気風に関すること

大学生との関係性を地域全体に広め、組織化しようとする動きや、YouTube（百井チャンネル）による情報発信、ドローン花火大会など、地域を守るために新しい手段を積極的に試そうとする傾向が見られる。

○「意欲」と「実行力」のギャップに対する課題認識に関すること

地域活性化に向けた前向きなアイデアが多く出される一方で、深刻な担い手不足への懸念が共通認識としてある。人口減少が進み、村総出での草刈りが困難になりつつある中で、ワークショップで発案された「やりたいこと」が実行できるのかという課題認識がある。

そのほかの意見

① 積極的に取り組みその効果を期待するものや、活用していきたい資源など

- ・大原から巫女を招き、窯で湯を沸かして豊穰や厄除けを祈る「湯上げ祭り」を今後も大切に守る。
- ・50年以上前にあった、松明で田畑を回る「虫送り」の行事復活を模索する。
- ・狩猟
- ・脱炭素活動
- ・地域資源の発掘と保全

② 経過を観察するもの、今のままであって欲しいものなど

- ・フキの育成。シカに食べられてしまうため、フェンスで囲いながら、土手を借りて育成している。フキは高く売れる。数年したら年齢的に作業ができなくなる。後の人が農業できるような環境を残しておきたい。
- ・米作りに関して、美味しいという声が多い。もっと頑張っけて作りたい、稲の病気が出たが研究しながら作り続けたい。

③ 取り組んでいるものの成果が見られないもの

- ・人口を増やす
- ・トイレや柵の管理
- ・ボランティアタクシー（公共交通の少ない地域で、地域住民がボランティアとして自家用車で送迎を行うサービス）
- ・遊ぶ場所（公園がない）

④ 新たな取組として創造するもの

- ・山間地域ならではの体験・学び